



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ガンツ・キューヘリガルテン』の成立前後：作家ゴーゴリの誕生
Author(s)	北垣, 信行; Kitagaki, Nobuyuki
Citation	北海道大學文學部紀要, 5, 167-192
Issue Date	1956-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33237
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_P167-192.pdf



『ガンツ・キューヘリガルテン』の成立前後

——作家ゴーゴリの誕生——

北
垣
信
行

『ガンツ・キューヘリガルテン』の^{註一}

成立前後

—作家ゴーゴリの誕生—

北垣信行

はしがき

田園詩『ガンツ・キューヘリガルテン』Gants Kinkh'garten は、誰が見ても、明らかに失敗作と見るだろう。併し、わたくしは、この作品が失敗作だからと云つて研究の対象としての価値がないとは思わないのである。ゴーゴリがこの失敗作をものした直後に踵を接するようにして出た『バザヴリユーク』(『イヴァン・クバラの前夜』^{註二})につづく一連の『デイカーニカ近郷夜話』^{註三}を形成する諸篇ではゴーゴリは何故俄かに芸術的完成の域に達し得、あれだけの成功を勝ち得たか?この問題を単に、ゴーゴリは韻文に向かなかつたからだ、つまり彼が『作者の告白』^{註四}の中で云つている、習作期の作品のような「抒情的な真面目な種類のもの」はV・G・コロレンコのいわゆるこの「偉大なるユーモリスト」^{註五}の肌合いに合わなかつたからだなどと云つて、簡単に片づけてしまふわけにはいくまい。M・V・フラプチェンコも指摘するように、『ガンツ』と『夜話』の間には、確かに、内的関連性は少ないにちがいない。そして、「思想的內容や技巧の見地からすれば」、これら兩作品の間には「完全なる深淵が横たわつている」と^{註六}いう彼の見解も、決して間違つてはいないだろう。『夜話』は、確かに、『ガンツ』の欠点の止揚を前提として

成功をおさめることができたと云える。云いかえれば、『夜話』の成功は『ガンツ』の失敗があつたればこそから得られたのである。その意味において、『ガンツ』は『夜話』への飛躍的發展の前段階であり、その研究は作家ゴーゴリの文学的誕生に關係するとも云える。まして、この『ガンツ』においては、本論の中で詳述するように、ゴーゴリの、『デイカーニカ』が出る前の伝記的背景がこの作品の重要なファクターをなしている。換言すれば、『ガンツ』は、『夜話』以前のゴーゴリの、云わば、間接的な魂の記録だつたのである。それに、内容的には「深淵」によつて隔てられているこれら兩作品も、形式の面においては、詩と散文の違いこそあれ、共通するもの、乃至は連続的に發展すべきものを持つている。これらのことを考慮に入れれば、この失敗作の研究が決して意味なしとしないことが自ずから明らかになるだろう。

次に、この論稿の主旨について述べれば、この論文の主要なテーマは、云うまでもなく、『ガンツ・キューヘリガルテン』の成立のいきさつである。併し、わたくしはここでは、この「成立のいきさつ」の問題の究明だけを志しているのではない。わたくしは、この「成立」を通して、ゴーゴリが、精神の上でも、創作技術の上でも、いかにして一人前の作家に成長していつたか、この点を明らかにしたいと思つたのである。そのほかに、わたくしはもう一つの意図を持つてゐる。それは、『ガンツ』の成立全般について論述するに當つて、これを成るべくその後の作品との関連において見ていこうとしたことである。で、その叙述の順序について云えば、わたくしはまず始めにこの作品の成立前後の伝記的背景について説明し、そのあとで、『ガンツ』の筋と構成について叙し、それから本論に入つて、現在のソヴェートでも論議中である『ガンツ』の制作年代決定の問題を究明しながら作品の構造の分析をおこなひ、その分析からゴーゴリの創作方法をも窺おうとした。勿論、ゴーゴリの創作方法とは云つても、創作方法全般にわたるわけにはいかない。この作

品の成立に関係ある部分だけに限られるが、併し、それはその後の中期後期の散文の作品の研究にもつながりを持つ事柄である。もう一つ考察しようと思つてゐる問題は、この作品に与えた内外の詩人の影響である。他の作家の影響というものは、多くの場合、影響を受けた作家の一つの作品のみに現れるものではなくて、その一時期の数篇の作品に及び、人によつてはその作風までも決定するものである以上、これまた、ゴーゴリのその後の作品、特に初期の作品群にも関係ある問題である。で、要するに、わたくしはこの論文において、このような広い視野のもとに『ガンツ』の成立の問題をあつかふことによつて、ゴーゴリの青年期の、精神的、文学的成長の跡を追つてみようとしたわけである。

註一 『ガンツ・キューヘリガルテン』とは、ドイツ人の主人公の名をそのまま叙事詩の題名としたもので、従つて、ドイツ語にすれば、Hans Kichelgarten とすることになるのである。ツヴェントのゴーゴリ研究家の G. N. ポンペーロフ、D. イオファーンフはガンツをガンスとしているが、古版の全集、例えば、Sochinenia i pisma N. V. Gogolia, izdanie P. A. Kulisha, 1857 ではガンツとなっている。

註二 今は『イヴァン・クバラの前後』という題名で『ディカーニカ近郷夜話』中におさめられているこの物語は、最初一八三〇年初頭にスズイニンの雑誌『祖国の記録』に掲載された時は、『ピサヴリユーク、またはイヴァン・クバラの前後』という標題になつてゐた。

註三 ゴーゴリ研究家の中には、例えばツラヴィーミヤ・ナホーコフのよちに、『ディカーニカ近郷夜話』の芸術的価値を低く見ている者もいる。彼は、この作品を、ローカル・カラーが強すぎるために普遍的な文学的価値を持ち得なうとして評してゐる。(これにひびくは、Vladimir Nabokov, Nikolai Gogol, London, 1947, p. 35—37 を参照された。)併し、わたくしはこの説には賛成できない。

註四 Sochinenia i pisma N. V. Gogolia, izdanie P. A. Kulisha, 1857, t. 3, str. 500.

註五 V. G. ロレンコフの『偉大なるユーモリストの悲劇』(Tragedia veli-kogo iumorista) とする論文の題名である。Pismo sobranie sochinenii V. G. Korolenko, 1914, t. 9, str. 365.

註六 M. B. Khrapchenko, Tvorchestvo Gogolia, Moskva, 1954, str. 92.

順序としては『ガンツ』の制作過程と出版前後の事情から説きおこすべきなのであるが、制作過程の問題は成立全般の中軸となる問題であるのみならず、この制作過程に関する直接的な資料は皆無と云つてよく、間接的な資料によつて推測するほかに手が無いような情況なので、これを制作年代決定の糸りで採りあげることにして、ここではまず出版前後の事情について述べ、そのあとで『ガンツ』の構成や筋について説明することにする。

ゴーゴリが『ガンツ・キューヘリガルテン』に『情景的田園詩』Idyllia v kartnakh という副題を附して、これを V. アーロフという筆名で自费出版したのは、ネージンの高等中学校を卒業して半年ばかり故郷のヴァシーリエフカに帰省していたのちペテルブルクへ出て来て間もない一八二九年六月のことである。大抵の伝記作家は、この頃までゴーゴリには文学的野心など一向になかつたと異口同音に述べている。確かに、資料の示すかぎりでは、当時彼は文壇に雄飛するよりも、官界や法曹界で名を成して国家と社会にとつて有益な人間になりたいという夢を抱いていたようである。例えば、彼は後年『作者の告白』の中で当時を回想してこう告白している。「作家の道がまさしくわたくしの進むべき道であるかどうかは、わたくしには断言できない。わたくしにわかつてゐるのはただ、わたくしが自分の将来についてあれこれと思いをめぐらしはじめた頃は(わたくしが将来について思いをめぐらしはじめたのはおなじ年頃の友だちがまだ遊びのことばかり考えていた頃のことである)、作家にならうという考など金輪際わたくしの脳裡に浮んだことはなかつた(傍点筆者)ということだけである。もつともわたくしは、自分が有名な人になり、わたくしの前途は洋々たるものであり、自分は一般の福祉のために何かをしとげるにちがいないという気はいつでもして

いた。わたくしは本当に、自分が或年限を勤めあげれば、国家勤務によつてそんなものは何でも得られるのだと考へていた。そう云つた訳で、若い頃にはわたくしのこの勤めをしたいという情熱は異常に強烈だつた」^註 また、一八二七年十月三日に叔父のピョートル・ペトローヴィツチ・コシャローフスキーに当てて出した手紙にもつぎのような文言が見出される。「僕はまだずいぶん昔から、それこそ頑固な年頃から、自分の一生を国家の福祉に必要なものたらしめようという消しがたい熱望に燃え、たとえほんの僅かでも国家に利益をもたらそうという考に沸きたつておりました：（中略）：僕は頭の中で国家におけるあらゆる身分、あらゆる職業を取捨選択してゐるうちに、或一つのものに目をとめました——それは司法畑です。僕は、この方面なら仕事が一番多いだろ、この方面をおいてほかに僕が功をたて得る所はない、この方面をおいてほかに自分が人類にとつて真に有益な人間になることはできないと考へたのです」^註 そしてそのあとで、「この世で最大の不幸である不正な裁判というものに、僕は何にも増して胸をひき裂かれる思いでした。僕は自分の短かい生涯のうちの一瞬間たりとも善事をなさずには費すまいと心に誓いました」とか、「僕は二カ年間ぶつとおしに他の民族の法律と万人にとつて基本的な法律である自然法の研究に従事してきました。そして現在にはわが祖国の法律を学んでいます」^註 などと書いてゐるところを見れば、ゴーゴリがこのように官使や司法官にならうという気をおこしたのは、ネージンの高等中学校で法律を講じ、のちに自由思想を学生に吹きこんだという廉で罷免されたN・G・ペロウソフ教授による感化の結果であつたことは疑いない。併しそれと同時にわれわれは、この当時のゴーゴリの人生についての考へ方にたいする同教授の影響が決して全面的なものではなかつたし、教授の見解をそっくりそのまま受容すると云つた形のものでもなかつたことも認めないわけにはいかない。ペロウソフという人は自然法を説き社会契約説を唱へて、それら

の理論からラジカルな結論をひき出すと云つたような、革命思想の持主であつたのに対して、ゴーゴリの考へ方には、国王が国民との契約を破棄する場合には国王はその地位を奪われるべきであるというような、或いはラジーシチエフやブーシキンがオード『自由』のなかで歌つたような、或いはペロウソフが講義で説いたような政治的見解に類するようなものは、その片鱗さえも認められないからである。そこには、ペロウソフ教授の見解をゴーゴリが意識的にか無意識的にか自己の性格にあわして取り入れた形跡が見られる。が、それにしても、ゴーゴリの職業選択に同教授の影響の跡がありありと看取されるということもまた、疑いない事実であらう。

それは兎もかくとして、このようにこの頃のゴーゴリは官界や法曹界における活躍を夢見ていたということが事実であつたとは云え、先に引いた、「作家にならう」という考など金輪際わたくしの脳裡に浮んだことはなかつた」というゴーゴリ自身の言葉を、その直接の反証はないにしても、そのまま受け取つてよいかどうか、わたくしは甚だ疑問であるとしたい。その理由の一つは、この言葉が長い年月をへだてた晩年に属するということである。第二の理由としては、ゴーゴリの発言には周知のように誇張癖があるということが考えられる。更に第三の理由には、『ガントツ』の制作をもふくめたゴーゴリの文学修業には、単なる遊びや余技とは受けとれない真剣さが認められることが挙げられる。ゴーゴリには、『ガントツ』を世に問う前に、かなりの数に上る習作的作品がある。

それらの中で現存するものはと云えば、『悪天候』、『イタリヤ』、『われらがヴラーリキンは世にも珍らしい人物』の詩三篇を数えるだけであるけれども、それら以外に、今は作品それ自体は残つていないが、友人たちの思い出によれば、更になお劇詩『盗賊』、中篇小説『トヴェルジスラーヴィツチ兄弟』、バラード『二正の魚』、史話『カルカ河畔の戦闘』、中篇小説『ネージン論』、または法律は馬鹿者のために草されたのではな

い』等の諸作品が学生時代の手書きの同人雑誌『星』や『文学の流星』に掲載されたということになつてゐる。これらの作品は、この時期のゴロリが文学を単なる余技と見ていたにしては、あまりにもおびただしい数のように思われる。更に、彼が上京前には既に完成に近かつたと推定される『ガッツ・キユーヘリガルテン』を携えてペテルブルクへ出て来たという事実の裏には、あわよくば文壇に打つて出ようという若き日のゴロリの鬱勃たる野心のほどが窺われはしないだろうか。更にまた、『ガッツ』の分量の老大きさも思いあわして見るがよい。当時のわかいゴロリの胸に、外交官として活躍する傍ら韻文の喜劇『智慧の悲しみ』を書いて不朽の名をとどめたグリボエドフの理想像が秘められていなかつたとは云えまい。^{註五}

何れにしてもゴロリは、そのような夢を抱いて、一八二八年の十二月の末に親友のA・S・ダニレフスキーとともに上京して、二人でゴロリホヴァヤ街の安下宿に旅装を解いたわけである。併し、ここで田舎出のロマンティックな青年の夢は無残にも裏切られて、彼は幻滅のどん底に突きおとされる。その幻滅と失望の情況は、早くも母親当ての上京後の第一信（一八二九年一月三日附の）から、手にとるようにはつきりと読みとることが出来る。その中でゴロリは、「僕にとつて、ペテルブルクは僕が考えていたのと全く違つていました。僕はペテルブルクをもつとずつと美しく、素晴らしいものに想像していたのです。ほかの人が扱めていたこの都会についての噂も、同様に嘘でした」と書き、「鬱ぎの虫にとつつかれ」て、一週間もの間何もせずに家に引籠つていたとか、持参した推薦状は何の役にも立たず、就職口にもありつけずにいるとか、「ここでは豚に近い生活をするにも、つまり一日に一回キャベツ汁とお粥を口に入れるにも、考えていたより比較にならぬほど高くつき……そのため、僕は砂漠におけるような生活を余儀なくされています……」^{註六}などと、母親に訴えている。そして、小官吏その他の勤め人の住むゴロ

リホヴァヤ街の薄汚い部屋に起居して、就職口を求めて官庁などをさまよい歩くうちに、長い間の夢であつた「国家勤務」なるものも彼の目に何の魅力もない灰色なものに見えてくる。そのことを彼は一八二九年四月卅日の母親当ての手紙の中でこう伝えている。「この静けさは異常です。庶民には精神の輝きなどは微塵も見られませんが、誰も彼もが勤め人か、さもなければ役人で、それが皆自分の課や省の話で持ちきつていて、あらゆるものが圧しつぶされ、すべてが些細な詰らぬ仕事の中になりこんでしまつて、彼らの生活はただ徒らにその仕事に消費されてしまふのです」^{註七}更に、同人当ての同年七月廿四日附の手紙にもこういう文言が見出される。「先に何の光明も見られないような所で、詰らぬ仕事の中に明け暮れた年々が心に辛い非難として響くような所で、一生を送るといふことは、——それは恐ろしいことです。五等文官か何かになるまで五十年も勤めあげ、辛うじてちやんと身を持していけるくらい給料を得て、人類には一片の福祉ももたらす力も持たずに暮すということに、何の幸福がありませんか！」^{註八}さらにまた、おなじ手紙の中で、「どこへ行つても僕は失敗にしか巡りあいませんでした。全く何ひとつ能力のない連中が何の引立てもないのに、僕が僕の面倒を見てくれる人たちの援助を得てもなお且つ獲得できないようなものをやすやすと手に入れてしまふのです」^{註九}などと書いていふところを見れば、長い失意の生活が彼にひがみまで起させていることがわかる。

このようにして官界における雄飛の夢がペテルブルクの生活の現実によつて破られるにつれて、ゴロリの胸にはそれと反比例して、作品を發表したいという意欲が次第に高まつてくる。それは首都の現実の生活の壁によつて阻まれたエゴセントリックな青年の情熱と野望があたりししい出口を求めて動き出したと云つた感じである。一八二九年の三月に初めて自作の抒情詩『イタリヤ』が雑誌『祖国の子』に掲載されたことに氣をよくした彼は、四月には『ガッツ・キユーヘリガルテン』を自費出

版するために検閲に出しており、更に前掲の母親当りの四月卅日附の手紙と五月廿二日附の手紙では、『ディカーニカ近郷夜話』の材料にするためにウクライナの風俗、習慣、伝説、迷信等について問いあわせると同時に、亡父が書き残した喜劇を二篇送つてくれるようにと頼んでい

る。こうして新たな方向をとつて動き出した青年の夢も、もう一度新しい障碍に出遇つて潰え去らなければならない。長い時間と多大の労力を割いて書きあげた『ガンツ・キューヘリガルテン』が、作者の予期に反して散々な酷評を受け、作者は文学の方面でもおなじ幻滅を味わわなければならなかつたのである。一般の読者層からは反響どころか、一顧だも与えられず、『モスクワ電信』の一八二九年の十二号と『北の蜂』の同年の廿七号にそれぞれ批評が出たことは出たけれども、何れも、このわかい詩人の作品を、構想が不明瞭だとか形式が不完全だとか云つて、ただこきおろしたに過ぎなかつた。そして唯一つせめてもの慰めは、オレスト・ソモフが一八三〇年の『北方の花』に載せた『一八二九年前半のロシア文学概観』の中で、作者の「想像力の若さ」や表現の未熟さを指摘して、もつと念入りに作品の構想を練るようにと忠告し、作品の発表を急ぐなと誠めながらも、「作者には未来の詩人を予示する才能が見られる」と思いやりのある批評をしてくれたことだけである。自負心の強いゴーゴリであつただけに、そして『ガンツ』がわかい客気に満ちた青年ゴーゴリの大きな野心と期待をかけた作品であつただけに、その失敗が彼に与えた打撃もまた大きかつたに違いない。叙事詩の不評に気を腐らした彼は、書店に委託販売の形式で出しておいた、大部分売れ残つていた著書を全部取りもどして来て、焼き棄ててしまつたばかりではない。そのあとで、ロシアに居たたまれない気持で、これという当てもないのに、ドイツのリューベックへ向けて放浪の旅に出ている。

『ガンツ・キューヘリガルテン』の発表前後のいきさつと、当時ゴー

ゴリがおかれていた心理的状态並びに精神状態の变化の様子は以上のようなものであつた。ここで特にこの頃ゴーゴリが味わつた心的体験について詳説したのは、後にこれを、叙事詩の成立の大きな要素である伝記的背景の説明に役立つる意図があつたことであることをここに改めて辞つておく。

註一 Sochinienia i pis'ma Nikolaja Vasilievicha Gogolia, Izdanie P. A. Kulisha, S P B, 1857, t. 3, str. 499—500.

註二 Pis'ma N. V. Gogolia, Redaktsia V. I. Shen'oka, S P B, t. 1, str. 89.

註三 上掲書。同頁。

註四 上掲書。同頁。

註五 『智慧の悲しみ』の全篇が公刊されたのは一八六二年、作者がテヘランで非業の死をとげてから実に三十三年を経た後であるが、一八二五年にはその一部分（第一幕の最後の四場と第三幕全部）が発表されており、一八二四年三月以降全篇が手写本の形でロシア中に流布していた。子供の頃から大の芝居好きであつたゴーゴリが学生時代に既に手写本でこの喜劇を読み、有名なグリホエードフの名を知つてゐたことには、疑いの余地はない。

註六 Pis'ma N. V. Gogolia, Redaktsia V. D. Shen'oka, S. Peterburg, t. 1, str. 115.

註七 上掲書。一一七—一一八頁。

註八 上掲書。一二四—一二五頁。

註九 上掲書。一二五頁。

二

叙事詩『ガンツ・キューヘリガルテン』には、扉のところらに発行者名義の序文がついており、叙事詩全体は『情景的田園詩』という副題に照応して、第一景、第二景、第三景……というふうに分かれて、全篇が十八景からなり、最後がエピローグで終つてゐる。

序文は、発行者が書いたことになつてゐるが、実は何らかの考えがあつてゴーゴリ自身が書いたものである。その考えが何であつたかはあとで考察することにして、ここでは先ずその序文を紹介しておこう。「こ

こにお目にかける作品は、もしも専ら作者自身の身にとつて重大な諸事情によつて促されることがなかつたならば、永久に目の目を見ることはなかつたろう。これは作者の十八才の青年時代の作品である。われわれはこれを教養ある公衆諸氏に提供するに當つて、この作品の長所短所を論らうことなく、ただ次のようなことだけを云わしていただく。この田園詩の景のうちの多くは、残念なことに、完全な形をとどめていない。それらのものは、今は切れぎれの断片になつてゐるけれども、恐らく前にもつと緊密なつながりを持つてゐたのだろうし、それに主人公の性格ももつと充分に描かれていたに違いない云々」この中の「作者の身にとつて重大な諸事情」というのが何を意味するのか、今俄かにこの点を詳らかにすることはできない。恐らくは、作者が実社会における出世の下らなさに氣づいて文学に転向することを思ひつた事情を指すのではないかと推定される。また、「この田園詩の景のうちの多くは、残念なことに、完全な形をとどめていない。それらのものは今は切れぎれの断片になつてゐるけれども、恐らく前にもつと緊密なつながりを持つてゐたのだろう」とあるが、実際には十八景のうち、第五景、第十二景、第十四景、第十五景の四景だけが脱落しているに過ぎない。或いは多くの景の中に小さな脱落部分があつて、これはそれをも含めての断り書かも知れない。そして、それらは多分検閲によつて削られたものと考へられる。この序文には、ほかになお重要な問題点があるけれども、それについてはあとで詳しく論ずることにする。

この叙事詩の世界は、近代リアリズムの作品にはかり親しんでいる現代の読者の目には、非現実的な、荒唐無稽の世界として映るに相違ない。荒唐無稽とは云つても、ここに展開されているのは、ブーシキンの『ルスタンとリュドミラ』のような童話の世界ではない。また、それはレールモントフの『ムツイリ』のような、反逆精神を象徴的に謳いあげたようなものでもないし、『デーモン』のような、全く非現実的な世

界を借りて自己の心理的体験を具象化したものでもない。現代人には親しみにくいとは云え、これはこれなりの淡い現実味を帯びた世界である。物語の最初の舞台は、ドイツの海岸のリユネンズドルフ、そこに主人公のガンツが隣家の老牧師の孫娘のルイザ・パッフに愛されながら牧歌的な平和な暮らしを営んでゐるところから物語は始まる。この夢多き青年ガンツは何の波瀾もない平和な日常生活に嫌らず、日夜知らぬ他国に思いを馳せて悩んでゐる。併し、初め、その悩みの実体が何であるかについては、作者は、ただ、

得体の知れぬ思いに胸をときめかせながら、
ガンツはただぼんやりと、
偉いなる、限りなき世界、
おのれの未知の運命を、見詰めるばかり。

(第二景第一節)

と書いてゐるだけで、

……とは云え、彼は、

胸ときめかせつつ、

ぼんやりと思ひわずらいながら、何を求め、

何を望み、何を欲していたのか、

……………(三行欠)……………

それは自分にもわからなかつた。

と云つたふうで、これを明示することを避けてゐる。併し、やがて第八景までくると、そこには夜中にガンツが夢現つのうち物思いに耽る場面があつて、その悩みの正体がようやくつきりしてくる。すなわち、

譽れを愛する魂をもちながら、
この世の卑賤なものを愛せるか？
心に仕合せの望みを抱きながら、

この世の動乱を味わつてはならないのか？

この世の素晴らしきものを受け入れ、
名を残してはならないのか？

とあるように、その日頃の悩みは、平和ではあるが退屈で下らない田舎の散文的な生活の中で自分を朽ちてさせたくはない、もつと広い世界へ躍り出て後世に名を残すような大事業を仕遂げてみたいという、ロマンティックな野望に根差したものであつたことがわかる。こうしてガントツは或真夜中、誰にも別れを告げずに、生れ故郷とルイザを棄てて旅に出る。その夜、ルイザは恐ろしい夢にうなされてふと目をさまし、胸騒ぎをおぼえながら恋人の書齋を覗いてみて、その時彼女は初めて恋人の失踪を知る。第十一景では、ルイザの苦悩する姿が田園の風景描写の点綴をともなつて描かれ、そのあとに『夜の幻想』と題した幾節があつて、そこにはジューコーフスキーのバラードを思わせるような曖昧模稜たる幻想の世界が繰りひろげられている。

物語の筋を三つに区分するならば、ここまでを第一の部分とすることができよう。叙事詩のこれまでの部分に現れたドイツの海岸の村の風景描写は、作者が行つたこともない土地を舞台に選んだだけに、成功しているとは云いがたい。そこにはドイツの風土的特徴も見られなければ、ドイツの田舎特有の風習も見られない。人物の描き方についても同じことが云える。ガントツにしてもルイザにしても祖父の老牧師にしても父親のヴェリゲリムにしても、ドイツ人の相貌を備えてはいない。主人公の性格描写にも、後期の作品におけるように、二、三の特徴を捉えただけで人物の像を的確に浮彫りにしていくゴロリの筆の冴えは全く見られないと云つてよい。これでは、断片になつていなかつたならば「主人公の性格ももつと充分に描かれていたに相違ない」という序文の言葉も単なる技巧の不手際をかくす弁明としか受け取れまい。併し、これを単にゴロリのこの頃の技術の未熟さのみに帰することもまた当を得ていな

いだろう。それは当然、ロシヤのセンチメンタリズムやロマンチズムの技術の水準の問題と関係させて考へるべき事柄である。それを知らなければ、カラムジンやジューコーフスキーの代表作の主人公の性格を思い浮べただけで充分であろう。プーシキンは生れながらロマンチズムの詩人たる資質を持つていなかつたとは云いながら、彼の腕をもつてしてさえ、初期のバイロニズム的作品において描いた人物の像は色退せて見える。ロマンチズムの詩人で最も人物を鮮明且つ巧みに描き得たのはレールモントフであろうが、この詩人にはまだロシヤ詩壇にその姿を見せてはいなかつた。それはまた、ロシヤのみならず、どの国にも普遍的に見られるロマンチズムの類型的性格描写の結果であるとも云える。ゴロリの場合でも、ロマンチズム的句の濃厚な次作『ディカーニカ近郷夜話』にいたるもまだ諸人物を類型的に描く弊を免れているとは云えない。もう一つ、これまでの部分での顯著な欠点は、ガントツの旅に出る動機づけが根拠薄弱な点である。成るほど、先にも説明したように、その理由は広い世間に出て大事業をしとげたいということであるらしい。併し、それは作者ゴロリのように、都会へ出て、官界で活躍しようというのでもなければ、次の景でギリシアを訪れるけれども、それはギリシアの独立戦争に参加しようというのでもない。つまり、主人公のしたいことが具体的に明示されていないことが、筋の構成の不自然さを感じさせるのである。

さて、ふたたび筋の解説に戻ろう。第十二景は、先にも触れておいたように、削除されているが、次の第十三景では舞台ががらりと變つてアテネとなつているところから判断するに、この第十二景には、ガントツがアテネに着くまでの旅の描写が当てられていたものと推察される。ガントツがアテネを訪れた時には、そこは戦乱に廢墟と化していて、もはや古代ギリシャの首都の壯麗な姿を偲ぶよすがもない。美しい古都を思い描いて辿り着いた旅人のガントツはその肅然たる光景に幻滅を覚える。そし

て彼はただ徒らに「胸に古えをよみがえらせよう」とし、憂いに満ちた目で「回教徒が：破壊した」古代芸術の「遺物」を眺めるばかりである。このあとの第十四景と第十五景も削除されているが、これも同様主人公のその後の遍歴の模様を描いたものと想像される。それは、第十六景の最初の句が「こうして二年の年月が流れた」となつてるところから推測できるのである。これまでが筋の第二の部分を形成している。この部分については、景が三つも脱落しているため、全体の印象を捉えて批評することは困難である。

次いで第十六景では、舞台がまたリユネンスドルフに戻る。ヴィリゲリム・バウフの家では、ルイザの祖父の牧師はずでに他界し、夢見勝ちな乙女であつたルイザも一人前の分別を備えた女に成長している。そこへ世の荒波に揉まれて疲れ果てうらぶれ果てたガッツが悄然と戻つてくる。後段でもう一度取りあげるが、この時主人公ガッツが世の中を見て持ち帰つた人生観と、彼の下す社会批判は、取りも直さず、わかい作者が当時のロシヤの首都にあつて抱いた人生観と社会にたいして下した批判であつたと考えてよい。そこには、形式こそ調つてはいないが、プーシキンが『コーカサスの捕虜』や『ジプシー』の中で、レルモンツフが抒情詩『思い』やその他の作品の中で試みたロマンチズム的な社会批判の調子と同じ調子が聞かれる。そして、これをゴーゴリの後の諸作品と関連づけて考えるならば、これは彼の将来の作品の社会的モチーフの先駆をなすものと見ることもできよう。ガッツは冷酷で卑俗な世人をこう痛烈に非難する。

彼らは墓場のように冷たく、

軽蔑すべき生きもののように卑しい。

ひとり利益と名譽のみが、

彼らには貴く、身近かなのだ。

彼らは素晴らしき才能を持てる者を侮辱し、

靈感をさげすみ、
天啓を軽蔑する。

彼らの伴りの情熱はつめたく、
彼らの反省は有害。

おお、誰が戦きをおぼえずに、
彼らの甘言に酔い痴れられよう！

彼らの息の何と毒気に満ちていることが！
胸のおののきの何と嘘偽なることが！

その頭の何と奸智に長けていることが！
その言葉の響の何とつろなることが！

この俗世間に対する批判とともに、わかい時代のゴーゴリの人生観、つまり人生の意義、人間の使命にかんする見解を窺うに足るのは、十七景の後半に見られる『想い』である。この人生にたいする見方には十九世紀の二〇年代三〇年代のロシヤのわかい知識層を支配したロマンチズム的獨念論的な物の考え方の影響の跡が見られるとは云え、それはまたこの当時のゴーゴリの毅然たる気概の自ずからなる吐露でもあつたと解して間違はないだろう。それは次のようなものである。

自己認識の時に、

たくましき力を持てる時に、

天に選ばれたる者が、

生存の最高の目的を覚り得た、

すばらしき瞬間こそ祝福さるべきだ。

その時、日夜彼の胸を騒がし、

騒然たる狂える俗世間へ彼を誘うは

うつろなる幻影でもなく、

榮譽の見せかけだけの輝きでもない。

彼を包み、彼を、

福祉と安寧の希望もて苦しみ、
彼に偉業を教え示すは、
ただひとつ堅固にして違ましき思想のみ。

彼はその偉業のためには命をも惜しまず。
俗業は徒らに狂えるごとく叫ぶとも、
それら生ける死骸の中に毅然として、

ただ子孫の祝福の声の、
とどろくを聞くのみ。

これに続く第二節では、作者は、こうした使命を自覚し鉄の意志を有する選ばれたる人に属さない人間の生き方について考察している。

欺くこと多き夢に、
輝かしき運命の渴望に煽られながら、
鉄の意志もなければ、
俗事のなかに身を持つる力もない者は――
居心地よき静寂につつまれ、
約ましき家庭に満足して、
世の喧騒には耳を貸さずに、
人生の野を流れ行くに越したことはあるまい？

これは、M・V・フラブチエンコも云つているように、人生の戦いに敗れてルイザと結婚して平和な家庭生活の中で眠ろうとする使命感も鉄の意志も持たぬ主人公にたいする作者の批判と見てよからう。フラブチエンコはこう云つている。「ゴーゴリは自分の主人公が空ろな夢に支配され、しかも灰色な俗物的生き方と和解している点を非難している。」

「しかし、ゴーゴリはガンツのその点だけを非難しているのではない。彼はガンツに人生の試練に耐える不撓不屈さが、意志が欠如している点を指摘しているのである」^{註一}

こうしてこの物語は、ガンツが二カ年間の遍歴の末リユネンズドルフ

へ立ち戻つてルイザと平和な結婚生活に入るところで終つている。
以上がこの田園詩の骨組みと筋立ての概要である。

註一 M. B. Khrapchenko, *Tvorchestvo Gogolia*, Moskva, 1954, str. 92.

III

さて、ではこの辺で本論に入つて、『ガンツ』の制作の経緯の究明に移らう。

はしがきでも触れておいたように、この叙事詩の制作年代については、帝政時代から異論があつて、今日でも定説と云われるほどのものは存在しない。その異論はどうして生じたのか、そしてその異論とは一体どんなものなのか、今それらについて解説して、最後に、この作品の制作年代に關するわたくしの見解を述べたいと思う。

問題が生じたのは、前に引用した序文からである。序文の中に「これは作者の十八才の青年時代の作品である」という言葉が見出される。ゴーゴリの生れた年は一八〇九年であるから、十八才の時と云えば、それは一八二七年のネージン高等中学校在学中に當る。その上、ゴーゴリ自身この作に「一八二七年作」と明記している。だから、これをそのまま信用してしまえば、何の問題もないわけである。ところが、ここに一八五四年、つまりゴーゴリの死後二年目に、この作家の最初の伝記作者となつたN・M・クリシが『N・V・ゴーゴリ伝の試み』という著書を出して、その中でゴーゴリのネージン時代からの親友のN・I・プロコポーヴィツチが『ガンツ』は一八二九年の作で、『一八二七年作』とあるのは伴りの日附だと憶断して以来、説が一八二七年作とするものと一八二九年作とするものの二つに分れて、いまだに決定を見ていない。クリシが伝えたプロコポーヴィツチの問題の発言というのは、次のようなものである。「もしもゴーゴリが自分の叙事詩を中学在学中に書いたとすれば、たとえその断片にもせよ、当時の彼の仲間の誰かに知っていたは

ずである。否、この叙事詩は間違いなく、彼がペテルブルクで仕事もなぐぶらぶらしていた頃書かれたものだ^{註三}。つまり、プロコポヴィツチはここでゴーゴリが嘘をついていると見ているわけである。

ところで、ゴーゴリの作品には、もう一つこれに似た事例が見出される。それは次作『デイカーニカ近郷夜話』の序文である。この小説は本名で発表されたものではあるけれども、序文では蜜蜂飼いのルードゥイ・パニコールが書いたという体裁になつてゐる。併し、この場合は作者がそういう体裁にした動機を推測するのにさしたる困難を感じない。それは、あのような幻想的なお伽話や怪談の語り手としては、蜜蜂飼いの老人のような人物が打つてつけであらうし、またスタイルにそうした人物の語り口を借りた方が物語全体が生きてくるだらうとも思われるからである。

ところが、『ガンツ』の方はいささか事情が違う。もし仮に二九年説を取るとすれば、序文を附け加えた理由は全く別の所にあつたと考えなければならぬ。その理由については、二九年説の支持者と見られるN・I・コロブカはD・N・オフシャニコ・クリコフスキー監修『十九世紀ロシア文学史』のゴーゴリの章の中で、次のような暗示を与えている。「ここでは唯、ゴーゴリには、たとえこの作品が一八二七年以降に書かれたものであつても一八二七年作と記すべき根拠はあつたようだとだけ云つておこう。ここで問題なのは、『ガンツ・キューヘリガルトン』の序文においてゴーゴリは読者を寛容ならしめようとしてゐるのではあるまいかということである^{註四}。これに比べれば、おなじ二九年説の主張者でも、ソヴェートのアカデミア版のゴーゴリ全集の編纂者のM・K・クレーマンとA・I・ペレーツキーの主張はもつと積極的である。彼らはこう書いている。「ゴーゴリが読者と批評家を寛容ならしめるために制作年月を韜晦するという手段を取つたとする考は肯定さるべきである。まして不明の発行者が序文を記したことにしていることが明らかな韜晦

であつてみれば、なおさらのことだ^{註四}。これを要するに、ゴーゴリは自己に自信が持てないところから、読者や批評家の酷評を避ける手段としてあのような序文を附けたというのが、三九年説の論者たちの見方だと云えよう。

さて、それならば、一方二七年説の論拠とはどんなものなのか、次にこの点について説明することにする。『ゴーゴリ作品集』の編纂者であるN・S・チホヌラーヴオフや『N・V・ゴーゴリ書簡集』の編纂者のV・I・シエンロツクは作者の目附を信頼することを主張した人たちであるが、今手もとに原資料がないため直接正確なところを伝えることはできないけれども、クレーマンとペレーツキーが間接的に伝えるところによれば、チホヌラーヴオフやシエンロツクは、「作者の目附が事実^{註五}に合つてゐることを主張した。彼らがプロコポヴィツチの疑惑を否定するに當つてその拠所としてゐるのは、ゴーゴリが特に高等中学校時代の最後の数年間に極端な秘密主義をとつていたという事実である^{註五}。つまり、彼らに云わせれば、ゴーゴリはすでに一九二七年に『ガンツ』を完成していたのだが、その事実を他人に明かさず^{註六}にいたということになる。このゴーゴリの秘密主義を二七年説の証拠の一つにあげてゐる点では、イオフアーノフも変りはない。彼は学生時代に特に顯著であつたゴーゴリの秘密主義的傾向を二七年説の傍証とするに當つて、前に引いたゴーゴリの叔父当ての手紙の中の、次のような箇所を引用してゐる。「ここ数年間僕はこれらの長い間抱いてきた自分の考えを胸に秘めて來ました。一体誰を信ずることができたでしょう、また何のために自分を人にひけらかすことがあるのでしょうか、結局自分の気がいじみた考を物笑いの種にさせ、自分を熱中しやうい空想家と思わせるだけではありませんか；誰にも、自分の仲間^{註六}にさえも、中には本当にそれに値する者も沢山いますけれど、僕は自分の考えを披露してみせたことはありません^{註六}」そして、イオフアーノフは更にこれに附け加えて、ゴーゴリが『ガンツ』を

自費出版した時に、その不評に氣を腐らせて本屋に出ていた著書をとりにどして焼却した事実を一生涯秘しかくしていたことを指摘している。ただ、ここで問題をはずきりさせるために一言注意しておかなければならないのは、引用文中の「これらの長い間抱いてきた自分の考え」というのが文学的野心ではなくて、前述のとおり、官界や法曹界における成功の夢を指しているということである。もつとも、そういう夢すらも隠していたとすれば、文学的野心にいたつては尙さらだとも云えるが、それでもなおこれらの証拠だけでは二七年作の証拠として根拠薄弱のように思われる。

イオフアーノフが挙げているもう一つの証拠は、二七年説をとる伝記作者の説の踏襲であると同時に、新たな伝記資料に基づくものである。それは、当時のドイツの詩人ヨハン・ハインリッヒ・フォス（一七五一—一八二六）の牧歌『ルイーゼ』が『ガントツ』の制作におよぼした影響である。イオフアーノフより前に、おなじ二七年説の主張者のV・I・シエンロツクは、ゴゴリの『ガントツ』制作の際に手本にしたと推定される、チエリヤーエフのロシア語訳のフォスの『ルイーゼ』を『ガントツ』と比較検討することを研究者たちに促している。もつとも、比較検討を提唱したけれども、彼自身はその仕事を果していない、と云うのは、ロシア語訳の『ルイーゼ』はその頃既に稀覯本となつていて、入手することさえ困難な状態だつたからである。ところが、その後ネージン高等学校の書庫からその訳本が発見され、しかも図書目録によつてそれが一八二八年一月前に購入されたことが判明したのである。そのことから、その頃学生のゴゴリは図書館の掛りをしていた関係もあつて、当然一八二七—二八年の間にそれを読んでいたに違いないと推定されるわけである。この牧歌が『ガントツ』に与えた影響は歴然としている。これら両作品がおなじようにセンチメンタリズム的抒情的な田園詩であり、『ガントツ』の物語の舞台もドイツであり、両作品の女主人公が同名であり、

フォスのほうのルイーゼは牧師の娘、ゴゴリのほうのルイーザは牧師の孫娘で、両作品とも同じようにわかい男女の結婚への道程を描いたものである等、類似点の多いところを見れば、両者の影響関係はその有無を論ずる必要もないくらい明白な事実である。併し、だからと云つて『ガントツ』が一八二七年に書きあげられていなければならぬということにはならない。という訳は、ゴゴリが『ガントツ』の想を得たのが一八二七—二八年だつたとしても、二九年頃まで書きつづけられていなかつたとは云えないからである。

イオフアーノフは更に、第三の証拠として、ガントツの気分や志がネージン時代のゴゴリ自身のそれらと一致している点を挙げている。このように作者とガントツの精神構造を関連づける見方をとつているのは、ひとりイオフアーノフだけではない。彼よりも前にN・コトリヤレーフスキーやI・シャロヴオーリスキーの先蹤があるのである。コトリヤレーフスキーはその著『N・V・ゴゴリ』の中で、『ガントツ』が自伝的性格を帯びている点を指摘してこう云つている。「ガントツはゴゴリ自身の肖像である。云うまでもないが、美化された、しかし基本的な輪廓は実物に忠実な肖像画である。安らぎのない精神状態、希望の漠然性、遠隔の地への憧れ、何やら得体の知れぬものを求めようとする傾向、見すばらしい現実^{第七}にたいする不満——すべてこう云つたメラニコリックな精神的不安の発作はゴゴリ自身ごく早くから体験したところのものである」先にも述べておいた、例の、ベテルブルクへ出る前のゴゴリの現実から遊離したロマンティックな野望や、彼が『ガントツ』の失敗後これという目的もなく発作的にドイツに向けて旅立つた事実などを思いあわせてみれば、このコトリヤレーフスキーの言が誤つていないことがわかるはずである。そして、序でながら云えば、『ガントツ』が失敗作に墮した大きな原因の一つは、この、普通人には理解しがたい精神乃至心理を、作者が主観的に描いてしまつたという点にある、とわたくしは見えてい

る。同様にして、わたくしには、『ディカーニカ近郷夜話』以後の作品が成功した原因の一つもまた、彼が『夜話』を契機として、人物を自分から引き離して見、人物の心理を客観化して描く術を身につけたことにあつたように思われる。それはさておき、このように当時のゴーゴリの生活感情をガンツのそれと結びつけて見ることをしているのは、イオフアーンフのような二七年説の論者ばかりではない。二九年説の主張者のI・シャロヴォーリスキーも、その云うところを要約すれば、この『田園詩』はゴーゴリがペテルブルクへ着いた後に書いたもので、その頃彼は周囲の現実^註にたいして強烈な不満を感じていたのであるというようなことを云つている。このように、おなじく伝記的事実と作品とを結びつけてそれを制作年代の決定に利用していながら、次に示すように、イオフアーンフとシャロヴォーリスキーでは、制作年代に関する結論がちがつてくるのは何故であろうか？それは引用の箇所がちがうからである。シャロヴォーリスキーは、明らかに、第十七景の、ガンツが帰郷後下した俗世間にたいする批判の箇所を念頭において結論を下しているのに対して、イオフアーンフは別の箇所を利用しているのである。この喰い違いは、わたくしがあとで下す結論の証拠の一つともなるのであるが、ここではただ、そう暗示しておくだけに留める。

それならば、イオフアーンフが二七年説の裏づけに利用しているのはどんな資料なのであろうか？それは、ゴーゴリの一八二七年六月二十六日附のG・I・ヴィソツキー^註当ての手紙と一八二七年十月三日附の叔父ビョートル・コシャローフスキー^註当ての手紙と、それに『ガンツ』の第八景の中で主人公が耽る物思いの詩句である。つまり、イオフアーンフに云わせれば、これらの手紙の中の文句と『ガンツ』の第八景の詩句には、おなじ思想が表現されているというのである。ヴィソツキーへの手紙には、こういう文言が見出される。「ほとんど世に知られることもない連中と一緒に死のような沈黙のうちに埋れ死ぬということ、な

んと辛いことだろう！君は僕らの町の生^{スチエストノヴァイナリ}存^{ソウズニエ}者^{ツォク}どもを、ネージンに居住する連中を、一人残らず知つているだろうが、あの連中は地上的なもので、つまり下らない自己満足の殻の中に閉じこもつて人間の高い使命を押し殺してしまつてゐるのだ。そして、僕はこういう生^{スチエストノヴァイナリ}存^{ソウズニエ}者^{ツォク}どもの中に躊躇して暮さなければならぬのだ。」^註 これらの言葉からは、この当時のゴーゴリの、見ようによつては傲岸不遜とも見える面魂と、俗物たちにたいするロマンティシズム的な批判精神が窺われるのであるが、これに照応すると思われるものが同様第八景の中にも見出せるのである。

すべては決せられた。今や正に、

この土地で魂を朽ち果てさすべきか？

別の目的を知つてはならないのか？

より良き目的を探し出してはならないのか？

おのれの生を死せる不名譽もて運命づけるべきか、

生きながら、この世にとつては死せるものとして？

こうしたこの当時のゴーゴリとガンツの精神の一致はさらに、ゴーゴリの叔父への手紙と第八景の前掲の詩句に続く詩句にも見出せる。ゴーゴリは手紙の中では、「ただ一つの偉業で名をあらわすこともなく塵あぐたの中に死に果てる——この世にありながら自己の生存を印づけずに終る————ということを考えただけでも、わたくしはぞつとします^註」と書きながら、一方『ガンツ』の第八景では次のように書いてゐるのである。（これは前に引用した詩句であるが、理解を容易にするために、もう一度引用することにする）

譽れを愛する魂をもちながら、

この世の卑賤なものを愛せるか？

心に仕合せの望みを抱きながら、

この世の動乱を味わつてはならないのか？

この世の素晴しきものを受け入れ、
名を残してはならないのか？

この作者と主人公の気分や志の一致には、疑問の余地はないようである。確かに、この第八景はネージン時代に書かれたものであろう。と云うのは、こうした気分つたような鬱勃たる功名心は、前にも述べたように、ペテルブルクの寒々とした現実に接したあとのゴーゴリの書簡には、その影をとどめていないからである。が併し、こうした気分や志は、たとえそれが一八二七年の書簡に現れてはいるにしても、一八二七年においでだけゴーゴリが体験したものでなくて、一八二八年にも感じていたとも考えられはしないだろうか。それ故、そう考えれば、この材料は、叙事詩の全篇が一八二七年中に書きあげられたという証拠にはならないはずである。

イオフアーノフは最後にもう一つ、二七年作の証拠をあげているが、ここに到つて彼の二七年説は破綻を来している。『ガッツ』の結末に、ガッツが故郷に帰つたのち恋人と結婚して青春に別れを告げて新生活に入らうとする際の心境を卒業期の生徒の心境になぞらえた部分があるが、イオフアーノフはそれを作者自身の卒業と関連づけてそれを自説の証拠としている。それらの詩句とは、次のようなものである。

彼（生徒）は一本立ちで、自由で、
自分とこの世に満ち足りた気持だが、
悪戯や苦勞や安らぎを共にした、

一つ家族の学友と、
袂を別つにあたつては、
思いめぐらし、呻吟して、
云い知れぬ愁いに、
思わず涙を落す。

これらの詩句は、或いは、イオフアーノフの云うとおり、ゴーゴリ自

身の卒業期の実感であつたかも知れない。併し、その実感であること自体が二七年説の反証であることに彼が気づいていないというのは、どうしたことであろうか。ゴーゴリの卒業は一八二八年の六月であつて、同年の末頃までヴァシリーエフカに帰省していた後、ペテルブルクに向けて出発したという事実を、この伝記作者は忘れてしまつてゐるのである。要するに、わたくしの考では、イオフアーノフの説には確かに傾聴すべき部分はあるにても、同時に不備な点も多いということを認めざるを得ない。

- 註一 N. M. Kulish とは 1910 『Н. М. Кулишъ и его жизнь』 (Opyt bioera, t. 1, SPB, 1854) 以外に、『Кулишъ и его жизнь』 (Zapiski o zhizni Gogolia, t. 1-2, SPB, 1856) という著書があり、その中に『Кулишъ и его жизнь』の発言が再録されてゐる。
- 註二 N. M. Kulish, Zapiski o zhizni Gogolia, t. 1, SPB, 1856, str. 66.
- 註三 Istorija russkoj literatury XIX veka pod red. D.N. Ovsianiko-Kulish, Moskva, 1910, t. 2, str. 280.
- 註四 N. V. Gogol', Polnoe sobr. soch., t. 1, AN, SSSR, 1940, str. 494.
- 註五 上掲書 同頁。
- 註六 Pis'ma N. V. Gogolia, Redaktsia V. I. Shenroka, SPB, t. 1, str. 89.
- 註七 N. Kotliarevskii, N. V. Gogol', P-g, 1915, str. 17.
- 註八 I. Sharovskii, Imenitskaia Idillia Gogolia SPB 《Pamiati Gogolia》 Kiev, 1902.
- 註九 Pis'ma N. V. Gogolia, Redaktsia V. I. Shenroka, t. 1, str. 75. この「ユーモリ」とは「生存者 sushchestvovatel'」という言葉を「凡々と醉生夢死する俗物」という意味に使用してゐる。このユーモリの専門語は、ユーモリ 研究家たちがユーモリの批判精神によつて説く場合に好んで引用する言葉である。
- 註一〇 Pis'ma N. V. Gogolia, Redaktsia V. I. Shenroka, t. 1, str. 89.

四

さて、わたくしがイオフアーノフの見解をそのまま全面的に受け入れる訳にはいかないということは、以上の、彼の説にたいするわたくしの反駁からほぼ推察できたことと思う。そこで今度は、『田園詩』の制作

年代の究明を別の面から試みることにする。

先にも言及したように、『ガッツ・キューヘリガルテン』はリアリスティックな要素のきわめて稀薄な作品である。が、それにも拘らず、全篇の諸所に当時の時代的背景が織りこまれていて、史実を知らずには完全には理解し得ない箇所があつて、それがこの作品の制作年代を決定する上の一つの重要な手掛りを提供しているものと思われるので、それらについて考察しながら、併せて『ガッツ』の構成の諸要素を分析していこうと思ふ。

『ガッツ』の第六景に、バウフの家族が庭の樹蔭でルイザの母親の誕生日を祝つてささやかな宴を張る場面がある。そこでは牧師の祖父と父親のヴィリゲリムが新聞の記事、つまり、

凶作の話、ギリシャ人とトルコ人の話、

ミソロンギの話、戦争の話、

すぐれた指導者コロトウロニの話、

カニングの話、議会の話、

マドリードの災厄と反乱の話、

を語りあつている。

ところで、これらの固有名詞が史上において関係のあつた時期は、大体、一八二二年から一八二六・七年頃にかけてである。ジョージ・カニング（一七七〇—一八二七）がキャットスレイの自殺後一八二二年にイギリスの外務大臣になつたのを切掛けとして、これより先一八二一年から既に開始されていたギリシャの独立戦争にたいするイギリスの政策には重大な転換がもたらされた。すなわち、それまでトルコと親密な関係にあつたイギリスが次第にギリシャの独立軍に財政的軍事的援助を与えはじめたのである。もつとも最初のうち、外交政策の方はかなり微温的であつた。一八二五年の八月にギリシャの国民集会がギリシャをイギリスに特別に庇護してもらふことを決議した時、カニングはトルコとの交

戦を危惧して、それを断り、その代りにフランス、ロシア等の大国をギリシャにたいして同情的ならしめるよう働きかけることを約して、それらの国々に頼らせようと図つただけであつた。それがかなり積極的な政策に出るようになったのは、ミソロンギが落ちた翌年の一八二六年になつてからである。イギリスはその年にロシアに呼びかけて、干渉を企てた。そして、一八二七年にはイギリスはロシアとともにフランスを説いて、七月にロンドン条約で三国同盟を結んで、トルコを威圧しはじめ、一八二八年十月には三国は艦隊を派遣してナヴァリノ海戦でトルコ・エジプト艦隊を撃滅している。

また、ミソロンギはこの戦争における西部ギリシャの独立軍の中心的な拠点で、周知のように、かのバイロンが独立軍を援助する意図をもつて乗りこんで、病いを得て陣没したのも、このミソロンギである。この都市をトルコ軍が最初に包囲したのは一八二二年で、トルコ軍はこの包囲戦に失敗を喫した後、一八二三年の秋にふたたびこの町の攻撃を始め、一八二五年の四月にはこの牙城を陥落させている。

更にまた、コロトウロニ（一七七〇—一八四三）は民族解放戦争当初からの独立軍の指導者で、一八二三年にはモレアの全軍の最高指揮官と臨時政府の副大統領に就任し、その後、ギリシャ軍に内紛が生じて勢力が二分された時には彼は一方の旗頭となつて叛乱を起してマヴロコルダトス派と抗争し、敗北を喫して幽閉の憂目を見たこともあるが、その後ふたたび政府の枢要な地位を占めて、ギリシャの完全独立のために尽瘁した人である。

最後に、これらの詩句の中には、スペインの首都マドリードが出てくる。ここでゴーゴリが「マドリードの災厄と反乱の話」と書いていふところを見れば、これは彼が一八二二—二三年の反革命の反乱とそれに続くフランス軍の侵入を念頭に置いていることを意味する。この事件は一八二三年に絶対主義の復活をもつて終りを告げたのであつた。

このように、『ガントツ・キューヘリガルテン』の物語の初めの数景は、一八二二—二六、七年頃に時代的な位置づけがなされているわけである。この時代的位置づけを直ちに制作年代と結びつけて考えることはできないけれども、これらの初めの数景が一八二九年よりは二七—二八年に書かれたと見る方がより妥当である、ということは云えるかも知れない。というのは、作者自身のギリシヤ独立戦争の趨勢にたいする関心は一八二七—二八年の方が強かつたろうと想像されるからである。この想像の正当性は、あとでもう一度説明するとおり、作者のギリシヤに対する関心がギリシヤのエミグラントの息子で作者の親友の、K・M・バジリの刺戟によるところが多いという事実によつて、更に一段と強化されることになる。

ではこの辺で、ふたたび視点をそのあとの諸景の時代的背景に移すことにしよう。第十三景でガントツがギリシヤの古都アテネに姿を現し、廢墟と化した都の姿に幻滅を感じたということは、先に述べたところである。そして、ガントツが旅に出た一つの目的が古代ギリシヤの遺跡をたずねることであつたことは、既に第三景で作者が古代ギリシヤについて歌つているところを見ても明らかである。それに、作者とその主人公の古都への憧憬が、一つはギリシヤ芸術の美に、一つはギリシヤ史上の諸事件の壮大さに、また一つには作者やガントツと同時代のギリシヤに時代精神の象徴として発現を見た「自由」の精神に発していたということは、第三景の、

クラシツクの、美しい創造物の国よ、
偉業の国よ、自由の国よ！

という詩句からも、また「三脚犠牲台からピレウスにいたる土地に偉大な民族が血を沸かし動揺している」という詩句や、大理石の典雅なるバルテノンとか、フェイジアスの手に成るミネルヴァの像とか、バルラシオス、ゼウクシスの繪画とか、ソフオクレスの悲劇とか、エビクロスの

微笑とかを讚美している箇所からも窺うことができる。こうした古代ギリシヤ文化、特にギリシヤ芸術にたいする讚仰は、ひとり『田園詩』制作当時のゴーゴリにのみ見られる現象ではない。これは西歐、特にドイツにおいてさうであるが、ロシアでは少し遅れて十九世紀の初め頃から古代文学に対する文学者たちの関心が大いに高まつたことがある。デカブリストの結社の前身である「救済同盟」の創立者であつたM・N・ムラヴィヨフはギリシヤ文学ラテン文学の愛好者で、その古代にたいする愛を詩人のK・N・バーチュシコフに植えつけ、バーチュシコフの詩のテーマと詩風の構成に一つの役割を果した。この詩人がエビキューリアンとなり、快樂主義的な詩篇を数多く書くにいたつた最初の刺戟はこのムラヴィヨフから受けたものである。また、このバーチュシコフが入っていたサロンの主人であつたA・N・オレーニンもまた、古代美術と古代文学に通じ、ヴァインケルマンやレツシングの古代芸術にたいする嚮方を学んで、そのサロンを訪れていた劇作家のV・A・オーゼロフや作家のグネージツチに影響を与えた。オーゼロフはオレーニンのサークルの人たちの趣味に刺戟されて、古代の世界に材を取つて戯曲を作り、十九世紀初葉最大の劇作家と謳われた人であるが、その作品には、ロシア史に取材したもの以外に、『アテネのオイジブス王』のようなギリシヤ史に取材したものもある。グネージツチもまた古代語からの訳を多数残しているが、中でも有名な優れた訳は一八二九年出版の『イリアス』である。この『イリアス』の訳本は、制作年代から云つて、ゴーゴリの『ガントツ』に影響を与えたとは云い難いが、P・N・サクーリンの、「(この訳業は)当時の文学における一大事件であつた」という言葉は、この時代のこうした古代文学愛好の風潮を物語つて余りあるであろう。サクーリンの云わゆる、当時の「中立派」に属する以上の人たち以外に、自由愛好とともに古代にたいする愛をゴーゴリに吹きこんだ者に、なおデカブリストの詩人であるキューヘリベツケルがいたことを附

け加えておかなければならない。事は既に影響の問題になつてくるが、この詩人の表現を借りれば、「民族が一人残らず詩人であつた」この古代ギリシヤへのこの詩人の傾倒が「ゴーゴリに及ぼした影響は、V・A・デスニーツキーやイオファアノフも指摘する」とおり、ギリシヤを愛するガンツの姓をキューヘリベツケルにあやかつてキューヘリガルテンとしたことからも、ほほ推察できるものと思われる。

さて再び本題に戻ろう。ガンツが旅路の果てで見出したギリシヤはただ自由の国のギリシヤではなくて、トルコの羈範の下に呻吟する虐げられたギリシヤであつた。次の詩句はそれをはつきりと示している。

ぼんやりした眼差しにも到る所に、

破壊と屈辱が読み取れる。

円柱の間には巻頭巾が見え隠れし、

回教徒は城壁ぞいに、

その廢墟や岩や壕割に沿うて、

馬を疾駆させていく。

先の「ミツロンギ」や「戦争の話」に関する新聞記事が一定の歴史的時点における諸事件であつたことが疑いのない事実であつたとするならば、この第十三景で描かれているアテネの情景もまた、一定の具体的な歴史的時点と関係つけて考えるべきであらう。アテネは、一八二二―二六年の間は、まだギリシヤ軍の手中にあつた。だから、もしこの時期にガンツがこの古都を訪れたとすれば、回教徒の姿などを目にする事はなかつたはずである。トルコ兵を見ることができたのは、一八二六年八月二十五日にアテネがトルコ軍に占領された後でなければならぬ。そして、だからこそ、ガンツは戦乱のあとの廢墟と化した蕭条たる古都の姿に接することにもなつたわけなのである。

一体に、ゴーゴリという人は、作品の中にこうした一定の時点における世界の動きを作品の中に織りこむようなことを余りしなかつた作家で

ある。そういう作家が特にこの『ガンツ』の中で、しかもこうした現実味の乏しい作品の中で、ギリシヤの独立戦争の成行きに強い関心を示した理由はどこにあるのであらうか。

その一つとして、当時のロマンチズムの詩人たちの影響が考えられる。デカブリストたちはこの民族解放運動に共鳴して、ギリシヤ民族の蜂起を注視し、これを心から歓迎したのであつた。その一人である詩人のルイレーエフはこの蜂起に詩を捧げた。プーシキンも、事は成らなかつたとは云え、バイロンにならつて、ギリシヤへ赴いて独立戦争に参加することを企てたことがあり、一八二三年には、「起て、おお、ギリシヤよ、起て！」という詩句に始まるギリシヤへの熱烈な呼びかけの詩を書いている。これらの詩が当時の青少年に与えた影響には、かなり大なるものがあつたらう。ゴーゴリもその影響を受けた一人であつたと考えてもまず間違ひはあるまい。

併しながら、この当時のゴーゴリのギリシヤへの関心を、単にプーシキンやルイレーエフの影響だけで説明してしまふには、その関心が余りも異常にすぎる。そこには、ゴーゴリ自身の生活の具体的な事実によつて理由づけられるべきものが伏在すると考えなければならぬ。それは、前にも一言触れておいたことであるが、ギリシヤのエミグランツのK・M・バジリとの交友関係である。

ゴーゴリとバジリとの交友関係について記述した伝記作者乃至ゴーゴリ研究家は、決して少なしとしない。わたくしが直ぐにも思い出せる限りでも、伝記小説『学生ゴーゴリ』を著したV・P・アヴェナリウス、伝記『N・V・ゴーゴリ』の著者D・イオファアノフ、それに、論文『ゴーゴリの初期の創作の歴史より』を書いたG・M・フリードレンデルを挙げる事ができる。

それらの労作によるに、K・M・バジリ（一八〇九―一八四）は一八二二年に、トルコ領内や本国のギリシヤから難を逃れてロシアへ入国した

他の五人のギリシヤのエミグラントの子弟とともにネージン高等中学校に入學している。ゴーゴリは早くからこのバジリとはふかい交りを感じ、二人の親交は終生變ることがなかつた。卒業後バジリは外交畑で活躍してゴーゴリとは進む方向がちがつたにもかかわらず、一八三三年から三六年の間にはペテルブルクでネージンの同窓生の集りにも数回出席したこともあり、一八四八年には当時シリヤとパレスチナのロシヤ総領事をしていた關係で、ゴーゴリがそのあたりを旅行した時には彼を案内してまわり、そのあとでロシヤへの帰國の行を共にしたこともある。が併し、この二人が最も深く交わつたのは、何と云つても、ネージン時代だつたと云わなければなるまい。それ故、その頃、わかいゴーゴリが、まだコンスタンチノープルから家族とともにロシヤへ避難してきたばかりのバジリからその生々しい体験談を聞かされ、バジリの感化でギリシヤの獨立戦争の動向に強い関心と同情をよせるにいたつただろうといふことは、想像に難くない。そして、これが『ガンツ』の創作の際にその構成上の一要素となつて生かされたのであれば、それは更にその成立の問題や制作年代決定の問題に何らかの示唆を与えてくれると考へて差支えあるまい。すなわち、『ガンツ』の成立にゴーゴリとバジリの交友關係が關係していたとすれば、一番親しい交わりのあつた時期、つまり學生時代に、少なくとも、ガンツがアテネを訪れる場面の出てくる第十三景までは書かれていたと考へてよいように思われる。と云うのは、前述したように、トルコ軍にアテネが占領されたのは一八二六年の八月二十五日で、第十三景にはその占領軍の一八二七年頃のアテネの情景が描かれてゐるからである。

さて、第十七景では、ゴーゴリは次のように、ガンツが空な希望に欺かれて陥つた失意の氣持を唄つてゐる。

見たところ、彼は遠い旅路を経て来た。
明らかに胸は痛み、

心は哀れにも疼き、悩んで、
今では彼は安らぎどころではない。

例の遅しい想いとはどんな想いだつたか。

彼は自からこれまでのおのれの盲動を訝がる、
なんと運命に苛まれてきたことかと。

そして自からを嘲ける、
厭わしき愚かな俗衆を、

自分の夢想から、信じきつていたことを、
おのれの心が愚かなところから、

その無意味なきらびやかさに目を墜つたことを。
ためらひもせず、勇敢に

彼らの抱擁の中へ飛びこんでゆき、
蠱惑され、酔わされて、

彼らの悪企みを真に受けていたことを。

そして彼は悲しくも今や、
多くの真理を思い知らされたが、

魂の奥に怒りを蔵しながら、
果して前よりも幸福になることができたろうか。

遙かなる輝く星に
おびき寄せられ、榮譽に惹かれてきたが、

榮譽の濃い匂は伴りだし、
光り輝く毒物は苦かつた。

正にこれこそゴーゴリ自身がペテルブルクへ出て来てから味わつた幻滅と失意の氣分の表明でなくて何であつたらう。それに、これらの詩句につづく、先に引用した例の社会批判の箇所は、作者がペテルブルクで俗衆の生活を具さに見て得た彼自身の実感の吐露でなくて何であつたらう

う。あのような社会批判の激越な調子には、単にブーシキンやその他のロマンチズムの詩人たちの社会批判的テーマの詩の影響と云つたような言葉では片づけられぬものがある。この点、この部分に関する限り、わたくしはシャロヴオリスキーの見解を支持したい。こう考えてくると、『田園詩』中のこれらの景は当然、一八二九年の初め頃に書いたとしなければならぬことになる。

ではそれならば、この叙事詩の最後の部分である、ガッツが家庭生活に入るに当つての心境を卒業期の学生の心境になぞらえた箇所が書かれた時期はいつということになるのであろうか。これについては二つの仮説が想定される。一つは、この箇所も同様着京後に書かれたと解する見方である。この考え方は、決して不自然ではない。なぜなら、作者が卒業期の心境を、イオフアーノフのように、卒業前に書いたと見る必要は毫もなく、卒業後に書いたと考へても差支えないからである。人間の或時抱いた感想はそんなに速く忘れ去られるものではない。もう一つの見方というのは、第十七景の社会批判の箇所が着京後特別にあとから挿入されたとする考え方である。これまた、ゴーゴリの創作方法、より正確に云えば作品執筆の過程を考慮に入れるならば、決して不自然ではない。ゴーゴリの作品の書き方については、次のような、N・V・ベルクがゴーゴリ自身の口から書き取つたものが残つてゐる。

「最初はしかるべく全部、たとえそれが不手際で、内容が充実していなかつたら、必ず全部をざつと書きつけてしまつたら、その帳面のことを忘れてしまふことが必要です。その後一カ月なり二カ月なり、時にはそれ以上なりしたら、書いたものを取り出して読みかえてみるがよい。そうすると、あなたは、多くの部分か思うようになっておらず、余計な所が多かつたり、何か足りない所があつたりしてゐるのに気づきます。そこで、修正をほどこし、余白に覚え書をしてもう一度帳面を忘れてしまひなさい。更にもう一度新たに検討する場合には、余白に新しい

書きこみをし、余白の足りない所へは別の紙片を取つて脇へ貼りつけるがよい。こうして全部一杯に書きこんだならば、帳面を手にして、それを自分の手で書き写しなさい。そうすると、自然に新たな照明が与へられて、新たに省略すべき箇所や書き加へるべき箇所や綴りをなおすべき箇所が出て来ます。そして、前の文章の間に、どうしてもなければならなかつたのに何故かどうしても一遍には出て来なかつた新しい言葉が飛び出てきます。そこでもう一度帳面を置きなさい。そして、旅行をするか、気散じをするか、何もしないでいるか、ほかのものでも書くかしなさい。そこでまた取り出し、読みかえて、おなじような風になおしなさい、そして、またもや帳面を一面に書きよごしたところで、それを自分の手で書き写しなさい。この頃には既にあなたは、綴りがしつかりして来、フレイズが仕上つて来、すつきりして来ると同時に、まるであなたの手もしつかりして来、文字が前より確乎として来、決定的になつてくるような気がすることに気づきます。わたしの考では、そういうことを八回ぐらいする必要がありません。」^{註四}

これは、ゴーゴリが自分の小説の書き方について説いた言葉である。併し、彼は詩を作る場合にも、これとおなじような態度で臨んだに相違ない。それどころか、小説よりも表現の不自由な詩においては、修正の回数も時間も、ともに多かつたと考へなければならぬ。そして、何度も加筆している間に、彼が先の社会批判の箇所のような新しい詩節をあとから挿入したということもあり得たわけである。また、こうした方法で綴られた『田園詩』であつてみれば、ずいぶん長い期間を必要としたに相違ない。しかも、先に引用した資料からも明らかのように、高等中学校の高学年の頃には法律など文学以外の研究にも多大の労力と時間を費していた模様であることを併せ考へれば、作品の完成がそれだけまた余計に遅延を余儀なくされたとも考へられる。以上色々な面から判断して、ゴーゴリは一八二七年あたりからこの叙事詩を書くために材料

を集め、二八年の初め頃、つまりフォースの『ルイーゼ』の読了後、構想をまとめて筆を下し、全篇の最初の草稿を書き上げてから何度も筆を入れて、最終稿は第十六景までを上京前に仕上げ、そのあとの残りの部分を着京後書き加えて、この叙事詩を完成した、というのがわたくしの、この作品の制作年代の問題に関する結論である。

以上で、『ガンツ』の制作年代の究明は終了したわけであるが、このような問題にたいしては、寸分の狂いもないような決め手は存在しない。それゆえ、いかに究明を重ねようとも、それは所詮飽くまで仮説の域を出ないことは云うまでもない。それでも、わたくしとしては、及び過ぎり実証的に問題の解決の追求を試みたつもりである。

註一 Istorija russkoi literatury XIX veka, pod red. D. N. Ovsianiko, Kulikovskogo, Moskva, 1910, str. 89.

註二 サクーリンの云々「中立派」とは、クラッシシズムの詩人たちと新たに出現したセンチメンタリズム乃至ロマンチズムの詩人たちの中間に位置を占めて、その何れにも批判的態度を持っていたオレーニン一派の人たちを指す。

註三 このキューヘリベツケルとキューヘリガルテンとの関係に初めて気づいたのはV・A・デスニーツキーである。彼は『ゴゴリの生涯と創作の研究の諸課題』(Zadachi izucheniia zhizni i tvorcestva Gogolia)という著作の中で、ゴゴリの叙事詩『ガンス・キューヘリガルテン』はプーシキンの学友でデカブリストの詩人であるヴェイリゲリム・キューヘリベツケルの名を思い起させるというようなことを云っている。そして、一八二四年から二五年にかけてキューヘリベツケルがV・F・オドエーフスキーと協同で刊行して自作の詩を載せていた文集『ムネモズイナ』は、ゴゴリが管理していたネージンの図書室にも入っていたかも知れないと憶測している。イオファーンフはその憶測を確かめるために、ネージン高等中学校の図書を調べてみたが、遂にそれらを見出すことはできなかった。併しイオファーンフは自分の家か、金持の親戚のトロシチンスキー家か、親戚の作家のカプニストの家で休暇の時にそれらの文集をゴゴリが借りたということはありうるというような想像を下している。D. Tolstov, N. V. Gogol, Detskie i imunosheskie gody, Kiev, 1951, str. 197.

註四 この引用文は、V. Veresaev, Kak rabotal Gogol, Moskva, 1932, str. 22の引用文から引用した。

五

これまでにも、わたくしは、他の詩人が『ガンツ』においてゴゴリに与えた影響については、例えば、フォースの『ルイーゼ』からの影響や、キューヘリベツケルによる影響等、事ある毎に触れて来たつもりであるが、まだ今までに云い残していることがあるので、ここでは専らその云い残した影響関係について説くことにする。最初に先ずドイツ文学による影響の考察から始めよう。

単にフォースの『ルイーゼ』のみならず、当時のドイツ文学が『ガンツ・キューヘリガルテン』に及ぼした影響は大きい。この当時、ゴゴリ自身にとつてドイツは憧れの国であり、讃仰の対象であつた。『ガンツ』の物語の舞台をドイツに取つたのは、決してフォースの影響だけによるのではない。また、彼がこの処女作の失敗後、他ならぬドイツへ飄然と旅立つたのも、単なる偶然ではない。このようにこの当時の彼がドイツにロマンティックな異国憧憬の感情を抱いていた何よりの証拠は、この叙事詩のエピローグの一節である。次に、その一節を紹介しよう。

思わずも感動しつつ、わたくしは、

静かに歌を唄い、

不可解な興奮を覚えつつ、

自分の国ドイツを唄う。

高遠なる思惟の国よ！

縹渺たる幻の国よ！

おお、わが魂は何と汝によつて満たされていることか！

偉大なるゲーテは、あたかも守護神のように、

汝を抱き護つて、

多くの素晴しい讃歌で、

憂いの雲を吹き払つてくれる。

この頃のゴゴリに見られる、このようなドイツ禮讃は、当代のロシアの知識層に共通な感情であり、当代のロシア上流社会の一つの風潮であつた。ロシアでは、十八世紀末以来法律や哲学を学ぶためにドイツに留学してゲツチンゲンその他の大学でそれらの學問を修得してくるのが、当時のインテリゲンツィヤの一つの流行であつたし、文學の分野においても、全歐洲を風靡した絶対主義の復活による国内の変動の最も顯著であつたドイツの社会的条件とデカブリストの乱以後のニコライの恐喝政治下のロシアの社会的条件との類似も手伝つて、一八二五年以後においてイギリス・ロマンチズムに替つてドイツ・ロマンチズムの流入が見られ、テイク、ノヴァリス、ホフマンらの作品が次々と反訳されて、ゲーテ、シラーの作品とともに、当時の読者層の間で大いに持てはやされていた。こうした風潮は、当然ながら、若いゴゴリの初期の作品にも、ドイツの文學作品による影響となつて現れている。

『ガンツ・キューヘリガルテン』に与えたフォスの影響については前述したとおりである。イオフアノフその他において、このフォスの『ルイーゼ』とゴゴリの『ガンツ』の相違点を挙げてその影響關係を過少に見積ろうとする傾向が見受けられるけれども、『ルイーゼ』が『ガンツ』の構想に際してあれほどに強い影響の跡をとどめていることが一目瞭然である以上、それは無用の業と云わなければなるまい。

このほかに、V・ヴィノグラドフがその著『ゴゴリと自然派』で紹介しているところによれば、ステンデル・ペーテルセンが論文『ヨハン・ハイリッヒ・フォスと青年ゴゴリ』(Joh. Hein. Voss und der junge Gogol) の中で、「一八二八年の夏に(ネージン高等学校終了後の)田園詩の最後の加筆の最中にゴゴリがシラーとテイクのつよい影響を経験していることを指摘し、且「ここに初めてガンツ・キューヘリガルテンのロマンティックな姿がその憂愁と作者の魂の正確な反映をともなつて現れ、われわれには、ドイツ・ロマンチズムの『青い花』が、

まだついこの間まで快活であらゆるものに満足していたこの田園詩人も理解できるようになつてきた事情がわかるのである」と述べていると併し、テイクの影響が一番はつきり出ているのは、何と云つても、次作の『デイカーニカ近郷夜話』においてであろう。『夜話』の中の『イヴァン・クバラの前夜』とテイクの『恋の魔力』との相似及び両者の影響關係については、チホヌラーヴオフやベトロフやコロブカの既に指摘しているところである。チホヌラーヴオフは、ゴゴリがドイツ語を知らなかつたという理由から、ゴゴリは『デイカーニカ』の初版と第二版の出版の中間の時期に出た『恋の魔力』のロシア語訳を利用したことは利用したけれども、初版の時には、小ロシアの伝説にもおなじようなモチーフのものがあつて、作者はこれから材を取つたのだという見方をしている。ところが、その後ベトロフによつて、ゴゴリはドイツ語に堪能で原書を利用することもできたということが立証されたため、このチホヌラーヴオフの仮説は見事覆えされた。尙このほかに、『夜話』中の『恐ろしき復讐』も同様、ドイツ・ロマンチズムの影響のもとに成つたものである。それは、物語の中に出てくるドネーブル河畔の城が、作者が云うようにカザツクのものではなくて、西歐の封建時代のそれであるところから検証されるのである。

次に、ロシアの文學作品で『ガンツ』に影響を与えたものについて述べよう。この『田園詩』の筋の構成に、フォスの『ルイーゼ』と並んで大きな役割を演じていると思われるものに、ジュコーフスキーのバラード『テオンとエスヒン』がある。このバラードは分量から云つて、『ガンツ』より遙かに小さいものであるが、両者の筋立てはきわめて酷似している。『テオンとエスヒン』の主人公エスヒンも、ガンツと同じように、漠然としたロマンティックな夢を抱いて恋人のテオンを棄てて他国へ出、世の中に失望して、故郷にひとり淋しく自分の帰りを待つていくれた愛人のもとに帰るのである。更にまた、そういった筋の類似以外

に、『ガッツ』全体のセンチメンタル・ロマンチズムの色調は、これがジューコフスキーの流れを汲んでいるもう一つの証拠と見ることもできよう。

では最後に、ブーシキンの『エヴゲーニー・オネーギン』と『ガッツ』とを対比してみることにする。ゴゴリは、『ガッツ』の制作に従事していた時分は、勿論、まだブーシキンとの個人的な面識はなかつた。併しながら、ゴゴリはその頃、疑いもなく、ブーシキンの初期のロマンチズム的な叙事詩や抒情詩には早くから接していたはずであり、M・K・クレイマンとA・I・ベレーツキーも『ガッツ』・キューヘリガルテン』にはブーシキンの影響が、ブーシキンの詩的全体系の影響が、特別な力をもつて発現した』と云つておられると、その影響には大なるものがあつたはずである。この影響がその後互いに個人的に知りあつてからますます強化されていつたことは、ゴゴリが一八三七年にパリにあつてブーシキンの計報に接したあとの、三月三十日附のボゴジン當ての手紙の中で、稍々誇張はあるにせよ、「わたくしの生活は、わたくしの最大の楽しみは、彼の死とともに滅びました。創作をするときは、わたくしはいつでも目の前にブーシキンだけを思い描いていました」と書いていることから窺えよう。事実、ゴゴリが人生觀の形成の上でも創作の指導の上でもブーシキンから受けた感化は大きい。

では、それならば、ブーシキンの『ガッツ』に与えた影響には、どういふ点が挙げられるだろうか。世界を経めぐつて俗世間に失望して帰つて来たガッツの姿には、ブーシキンの初期の叙事詩の『コーカサスの捕虜』の将校や『ジブシー』の主人公のアレーコの上流社会に失望して自然の中に逃避した姿を彷彿させるものがあり、また、『ガッツ』の社会批判的モチーフにはブーシキンの社会的モチーフを扱つた抒情詩に似た調子が聞かれるということは、先に既に触れておいたが、そのほかに、実証し得る影響には、『エヴゲーニー・オネーギン』と『ガッツ』・キュー

ヘリガルテン』との関係がある。

資料の示すところでは、ゴゴリは学生時代に、当時章毎に雑誌に發表されつゝあつた『エヴゲーニー・オネーギン』には異常な興味と関心を寄せていたようである。一八二四年にはこの叙事詩はまだ一章も發表されておらず、ただ文学新聞の一八二四年の第四号にその予告が出、見本として第二十一章中の断片が掲載されたにすぎなかつたにも拘わらず、その頃まだ十五歳の少年だつたゴゴリは同年の十月一日に父親に手紙で「叙事詩オネーギン」を送つてくれるようにと頼んでいる。また、A・S・ダニエルフスキーの回想にも、「わたくしは彼やプロコポヴィツチと共同で雑誌や文集を取つていた。われわれは三人で寄り合つては、その頃章毎に出ていたブーシキンの『オネーギン』を読んだものである。ゴゴリはすでにその頃ブーシキンに夢中になつていた」とある。以てゴゴリの関心の程が窺われよう。

このようなくらいであつてみれば、ゴゴリが大作と自負していたろう『ガッツ』・キューヘリガルテン』の制作に際して『エヴゲーニー・オネーギン』が常に彼の念頭を離れなかつたろうということは想像に難くない。事実、ゴゴリが『ガッツ』を書くに當つて『オネーギン』を或程度手本にした形跡は残つている。オオフアーノフは、ルイザが悪夢にうなされてふと目を覚し、胸騒ぎを覚えながらガッツの部屋を訪れる場面がブーシキンの叙事詩の女主人公のタチャーナがエヴゲーニーの立ち退いたあとの主な家を訪れる場面と似ているところから、ゴゴリは『オネーギン』から『田園詩』の筋のこの条りのヒントを得たと主張する。確かに彼のいうとおり、『オネーギン』の第五章には、オネーギンがレンスキーを決闘で倒す前にタチャーナが不吉な悪夢にうなされる場面もあるし、第六章には、エヴゲーニーが姿をくらました後、タチャーナが思い出の男の部屋を訪れて在りし日を偲ぶ場面もあつて、『ガッツ』の筋にこの『オネーギン』が関係している証拠が認められる。わたくし

自身もこの關係を認めるのに吝かではないが、ここでイオフアノフの見解の矛盾を指摘するならば、これら第五章と第六章は一八二八年に發表されており、その点彼の二七年説とは完全に喰い違いを生じているわけ、この点から見ても、この『田園詩』が主として一八二八年に書かれたとするほうが正しいようにわたくしは思う。

ここにもう一つ、イオフアノフが『オネーギン』の『ガンツ』に与えた影響として挙げている点に、『オネーギン』の副人物レンスキーとキユーヘリガルテンのタイプ上の影響關係がある。彼はこう書いていゝる。「プーシキンが『ロマンティスト』レンスキーの形象を巧みに描いている『エヴゲーニー・オネーギン』の第二章は、一八二六年の十月に出ている。それゆゑ、ゴゴリがまだネージンにいた頃に敬愛する詩人の詩の長篇小説のこの章を読んで、この時期の自分自身の気分に合わせてこの形象を利用してその形象の諸特徴を自分のガンスに反映させたということに疑いの余地はない」^{註八}

當時のロシアのあらゆる青年の魂を擱んでいたプーシキンであり、そのプーシキンにあれば熱中していたゴゴリであつてみれば、ガンツの性格を決定し、描写するに當つて、彼がこのレンスキーを手本にしたということは確かにあり得べきことである。V・G・ペリンスキーはかの有名な『エヴゲーニー・オネーギン』に関する論文の中で、このレンスキーについて次のような甚だ的確な特徴づけを行つてゐる。「レンスキーはその本性からいつても時代精神からいつてもロマンチストであつて、こんなことはいふ必要もないかも知れないが、これはあらゆる美なるもの高遠なるものが理解できる人物であり、清純で高貴な魂の持主である。が併し、それと同時に、「彼は心は優しいが物を知らぬ人間」^{註九}であつて、絶えず人生について論じながら、決して人生を知つてはいなかつたのである」^{註一〇}。こうしたレンスキーの性格づけは、そのままガンツ・キユーヘリガルテンにも当てはまる。プーシキンは『オネーギン』の

第六章第三十七節で、レンスキーが決闘で倒れたあとで、このレンスキーのような情熱的なロマンティックな詩人が死ななかつたら辿つたかも知れない道についてこう思いをめぐらしてゐる。

事によつたら彼は世界の福祉のために、

さもなければ榮譽のために、この世に生を享けたのかも知れない。

彼の今は黙した立琴^{リッパ}が

響高き絶えざる音を

とこしえに放ちえたかも知れない……

そして、檢閲を通らなかつたために現在完全な形をとどめていない第三十八節では、彼は氣高い自己犠牲的な行動に出て、ルイレーエフのように刑場の露と消えたかも知れないと唄つてゐる。併しまた、作者は第三十九節では、もしレンスキーが命を全うしたならば、案外、單なるありふれた凡人として平凡な家庭生活を送つたかも知れないと、次のような判断も下してゐる。

が、また、詩人を待つていたのは、

平凡な運命であつたかも知れない。

青春時代の数年が過ぎて、

内なる魂の炎は冷え、

いろいろな点で變化をとげ、

ミューズとも別れて、結婚をしたかも知れない。

面白いことに、ゴゴリもまた、ロマンティスト・ガンツの辿る道について、おなじような二つの可能性を予想して、ここにもプーシキンの影響が看取されるのである。それを確かめていただくために、ここに、前に引用した詩句をもう一度引用してみよう。

自己認識の時に、

たくましき力を持つてゐる時に、

天に選ばれたる者が、

生存の最高の目的を覺り得た、すばらしき瞬間こそ祝福さるべきだ。

その時、日夜彼の胸を騒がし、

騒然たる狂える俗世間へ彼を誘うは、

うつろなる幻影でもなく、

榮譽の見せかけだけの輝きでもない。

彼を包み、彼を

禍祉と安寧の希望もて苦しめ、

彼に偉業を教えずは、

ただひとつ堅固にして逞ましき思想のみ。

彼はその偉業のためには命をも惜しまず。

俗衆は徒らに狂えるごとく叫ぶとも、

それら生ける死骸の中に毅然として、

ただ子孫の祝福の声の

とどろくを聞くのみ。

欺くこと多き夢に、

輝かしき運命の渴望に煽られながら、

鉄の意志もなければ、

俗事のなかに身を持する力もない者は――

居心地よき静寂につつまれ、

約ましき家庭に満足して、

世の喧騒には耳を貸さずに、

人生の野を流れ行くに越したことはあるまい？

こうして、ガンツはこの第二の道を選んだ。併し、この主人公とおな

じようにロマンティストではあつたけれども、「自己認識」に徹し、常

に内にひそむ「たくましき力」を意識していた作者ゴロゴリには同じ道

を歩むことはできなかつた。彼は、「人間の高い使命」を知らぬ「生存者」どもの間に踰踏して「ただ一つの偉業で名をあらわすこともなく塵あくたの中に死に果てて、この世にありながら自己の生存を印づけずに終る」ような生活に満足できず、第一の道を選んで、ドイツ滞在も束の間にして帰国し、新たに力を奮いおこして新作に着手し、やがて『ディカーニカ近郷夜話』をひっきりさげ文壇に打つて出るのである。

註一 V. Vinogradov, Gogol' i natural'naja shkola, str. 35.

註二 この間の事情のより詳細な説明は Ovsianiko-Kulikovskii, Istorija russkoj literatury XIX veka, Moskva, 1910, str. 284 にある。

註三 上掲書、二八五―二六頁参照。

註四 N. V. Gogol', Poln. sobr. soch., t. 1, AN SSSR, str. 495.

註五 Pis'ma N. V. Gogolia, Redaktsija V. I. Shenoka, t. 1, str. 434.

註六 V. I. Shenok, Materialy dlia biografii Gogolia, t. 1, M., 1892, str. 102.

註七 D. Iofanov, N. V. Gogol' Kiev, 1951, str. 188.

註八 上掲書、一八七頁。

註九 『エヴゲーニー・オネギン』第二章第七節中の詩句。

註一〇 V. G. Belinskii, Polnoe sobranie sochinenii, Moskva, 1955, t. 7, str. 470.

附記 この論文を印刷に附している間に、たまたま N. L. ステパノフ著

『N. V. ヨーゴリ。創作の道』N. I. Stepanov, N. V. Gogol', Tyorsheski pnt, 1955,』を入手して読む機会に恵まれ、その中の著者の所論で「わたくしが

新説として本稿の中で論証したことと完全に一致している点が二つあるのを発見した。

一つは、ゴロゴリにはベテルブルクへ出る頃まで文学的野心はなかつたとする、これまでのゴロゴリ研究家の見解にたいするわたくしの反論とステパノフの見解との一致である。この点について、ステパノフは『作者の告白』中の「わたくしが自分の将来についてあれこれと思いをめぐらしはじめた頃、作家になるという考など金輪際わたくしの脳裡に浮んだことはなかつた」という言葉を引用した後、「ゴロゴリのこの後年の告白は条件つきで受け取ることができ、これは勿論である、なぜなら、彼の初期の文学との関係は、この活躍舞台も既に中学時代に彼の「脳裡に浮んだ」ことがあつたことを立証しているからであ

『ガンツ・キューヘリガルテン』の成立前後 北垣

る」(上掲書、三四頁)と述べている。

もう一つは、本稿の主要テーマの一つである、『ガンツ・キューヘリガルテン』の制作年代に関する著者の見解である。彼はこの問題にたいして次のような断定を下している。「一八二七—一八二八年の書簡(P・P・コシャローフスキー、G・I・ヴィツツキーへの)に表明された彼の見解の表現がこの叙事詩に見出されることから見て、この叙事詩はゲーゴリの中学校在学中の最後の数年間に書かれ、一八二九年の初めにベテルブルクに移り住んだ後に最後の仕上げがなされ、補足されたものと、確信をもつて推定することができる」(上掲書、三六頁) ステパーノフのこれらの発言は、わたくしのそれのように詳細な論証を経た上のものではないが、わたくしの見解と驚くべき一致を示しているので、ここに附記として紹介しておく次第である。